

# IV

## 結論



陣馬型山から駒ヶ根市方面を望む（2019年11月）



■ 天竜川の魚類を取り巻く諸問題

■ 生息環境保全の取り組み

■ 未来の天竜川に向けて



## 天竜川の魚類を取り巻く諸問題

古くから「暴れ天竜」と呼ばれてきた天竜川。江戸時代の1715年には、天竜川最大の洪水とされる「未（ひつじ）満水」により伊那谷の至るところで川があふれ、濁流が湖のように広がったとされています。その後も昭和36年の三六災害、昭和58年の五八災害のほか、最近では平成18年の7月豪雨による災害も記憶に新しいところです。令和元年度は、幸いにも伊那谷では大きな被害は発生しませんでした。千曲川流域や東北地方に甚大な被害をもたらした台風19号による洪水も発生しました。

伊那谷の人々は、この「暴れ天竜」による水害を少しでも克服しようと様々な取り組みを行ってきました。未満水の後に築かれた堤防「惣兵衛堤防」や「理兵衛堤防」などは、天竜川沿いに住む多くの人々の命や暮らしを守り続けてきました。また、飯田市上郷別府にある夜泣き石、高森町市田の六地藏などは、災害の記憶を風化させずに後世まで伝えていく思いを石碑や伝承にこめられたことを示すものと言えます。

さて、このような「暴れ天竜」ですが、一方では人々に川の恩恵を与え続け、伊那谷の人々は天竜川と上手につきあうことにより生活を豊かなものにしてきました。江戸時代から有名であった天竜川の鮎やナをはじめ、ウケ漁やザザムシ漁、戦後から昭和の時代に隆盛をきわめた鮎釣りなども、天竜川を取り巻く文化の代表的なものです。また、アブラハヤやウグイなどの「ザコ」釣りも子供たちにとって恰好の遊び相手であり、川に親しむ入り口となっています。それは、天竜川が持つ自然や生きものの豊かさに支えられているからこそに他なりません。

このような天竜川の生態系が変わりつつあります。かつては「いくらでも釣れ



台風19号通過翌日の高遠ダム(2019年10月13日)



ウイルスによって衰弱したアユ(2017年8月4日)

た」と言われたアユが育ちにくくなり、以前のように鮎釣りの人でにぎわう光景は少なくなりました。また、ウグイやヨシノボリなどの「ザコ」も少なくなっているようです。その原因は詳しくはわかりませんが、コクチバスなどの外来魚やカワウなど魚食性の鳥類が増えていることや、ウィルスなどの病原菌が原因の一つとも言われています。

天竜川に棲む魚を代表する河川生態系の変化は、今、過渡期にあると思われます。しかしながら、最近では川と人々の関わりが以前よりも薄れているように感じます。人が川に対して関心を示さなくなると、川の中で起きている変化に気が付かないだけでなく、自然災害に対する意識や備えも薄れていくおそれがあります。この豊かな恵みをもたらしてくれている天竜川がどのように変わっていき、私たちはどう対応すべきか、天竜川の魚たちが考えるきっかけを与えてくれている気がしてなりません。

## 生息環境保全の取り組み

平成18年7月18日、長野県に接近した台風4号の接近と停滞していた梅雨前線の活発化によって諏訪湖や三峰川流域など広い範囲で大雨となり、水かさが増した天竜川では大きな洪水となりました。この豪雨により、岡谷市などで土石流が発生し、甚大な被害が発生しました。天竜川では田畑等の浸水被害が発生したほか、殿島橋が落橋、箕輪町松島地区の堤防決壊など被災範囲は広範囲に及びました。



虻川合流後の清透な天竜川(2017年6月19日)



台城橋上流の天竜川(2010年9月11日)

## 未来の天竜川に向けて

伊那谷の真ん中をまっすぐに、時に蛇行しながら流れる天竜川。

諏訪湖から流れ出た天竜川は、南アルプスと中央アルプスに挟まれ、三峰川や小渋川、太田切川や与田切川などの支流を合わせながら流れ下り、鷲流峡や天龍峡などの名勝を通りながら最終的には遠州灘に流れつきます。

「暴れ天竜」とも呼ばれ、数々の水害、土砂災害を起こしてきた天竜川ですが、その豊かな生物相や独特の河川生態系を背景に、鮎釣りやザザムシ漁、さらには子供たちの魚釣りや虫取りなど遊び・学びの場として、人々の生活にも深く関わってきました。

昔の人は、天竜川の淵に名前をつけ、様々な伝説で彩りながら親しみを込めて天竜川に接してきました。また、このような淵で子供たちは日が暮れるまで川で泳いだり淵に飛び込んだりして、生きものとたわむれ、社会性を身につけながら自然の脅威、畏怖についても学んできました。天竜川を眺め、足を踏み入れ、時には川に入って魚釣りや川遊びなどを通じて、そこにはごく普通に天竜川と接する生活があったのです。

最近の天竜川は、外来魚であるコクチバスが増え、河原にはオオキンケイギクやアレチウリなどの帰化植物も繁茂しています。また、川に人の姿が少ないためか、カワウが飛来して川の魚を捕食することで、ウグイなどの「ザコ」が減少しているとも言われています。一方で、天竜川の水質が改善されてきたことで、きれいな水に棲むカワゲラやアマカなどの水生昆虫が増えてきたという嬉しいニュースもあります。

近年、日本各地で、これまでに経験したことのないような豪雨による深刻な水害や土砂災害が毎年のように発生しており、天竜川も例外ではありません。天竜川上流河川事務所では、水害や土砂災害から住民の方々の命や生活を守るための取り組みを進めるとともに、このような天竜川で起きている変化・現象をしっかりとらえながら、自然環境に配慮した事業を進めることで、天竜川が生み出す恩恵を地域の方々が継受できるよう取り組んでいきたいと考えています。

2020年3月23日



この災害による復旧工事は、「激特事業」として諏訪湖から三峰川との合流点までの約31.5kmの区間で行われ、護岸の補強や洪水を安全に流すための河道掘削、橋梁の補強などの緊急工事が実施されました。工事は、天竜川でもまれにみる大規模なものであったことから、河川環境や景観へ配慮するため、学識者による多自然川づくりアドバイザーによる意見を仰ぎながら工事が進められました。

工事では「瀬・淵の復元や保全」「元河床のスライドダウン」「アユなどの魚類に配慮した大石の設置」などの方針が固められ、試行錯誤を繰り返しながら進められました。工事によりうまくいった例もあれば、河床が平坦化して単調な流れになるという例もありました。そこからは、工事箇所の上下流を広い視野で河川を見ること、砂州が形成される構造を理解すること、みお筋を戻すのではなく、砂州を戻すことを意識することなどの改善点が見出されました。この時に得られた成功例や失敗例は「河床復元マニュアル」としてまとめられ、現在でも施工業者等によって活用されています。

洪水のたびに流れが変わる川の営みはダイナミックで、その上に成り立っている河川の生態系はとても複雑なものです。天竜川に棲む魚類も、天竜川の瀬や淵、ワンド、湧水などをそれぞれの種が上手に利用し、みごとに使い分けて生活しています。激特事業の際に学んだ、川をよく見ること、川の成り立ちをよく理解することが魚類をはじめとした河川環境の保全につながるものと考えています。

